

○地域貢献研究 T-1

研究課題

茨城における地域在住障がい者に向けたスポーツプログラム運営の組織化に関する研究

- 研究代表者 理学療法学科 准教授 橘 香織
- 研究分担者 作業療法学科 教授 堀田和司
(5名) 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟 石田 菜月
医療法人晴生会 介護老人保健施設桜の郷祐寿苑 小柳 明世
医療法人重陽会 介護老人保健施設なでしこ 愛知 裕子
付属病院理学療法科 久保田 蒼

- 研究年度 平成29年度 (研究期間) 平成27年度～平成29年度(3年間)

1. 研究目的

研究代表者らは2011年度～2014年度地域貢献研究において、地域在住障がい者が利用可能なスポーツプログラム(IBARAKI Sports for Everyone!：略称ISEプログラム)を開発した。このプログラムは本学体育施設を利用し、在学生・卒業生がスポーツボランティアとして参加して行うものである。利用者にとっては車いすに乗ってスポーツをする機会の創出、大学にとっては人材と施設を生かした地域貢献、そして在学生・卒業生にとってはスポーツボランティア活動を通しての人間形成、と参加・関与するいずれの立場においてもメリットがある活動を目指している。研究代表者らはこれまでの研究において車いすバスケットボールを中心に定期的にISEプログラムを実施し、利用者にとって心身の健康増進効果があることを示してきた(橘, 2013)。次の課題としては、受け入れる側のスタッフの人数の増加ならびに質的向上を図り、多くの参加者を受け入れ可能にするための組織としての発展を目指すこと、そして、地域の中で車いすを利用したスポーツプログラムに対するニーズに応えられる多様なプログラムを育てていくこと、の二点があると考えている。

そこで、本研究の目的は、ISEプログラムの運営の充実を図るために、①スポーツボランティアとして活動するスタッフの質的向上ならびに活動継続に必要な要因を検討すること、そして②茨城県においてどのような障害者向けスポーツプログラムへのニーズがあるかを明らかにし、自治体や教育機関と連携して障がい者スポーツの普及・発展を推進する組織づくりの基盤を構築することである。

2. 研究方法

1) 研究協力者

ISEプログラムの中でも最も利用者の多い「車いすバスケットボールビギナー教室(以下、車いすバスケ教室)」にスタッフとして参加した21名(他大学の学生を含む大学生スタッフ8名、社会人スタッフ13名)のうち、年度途中から参加した学生スタッフ1名を除く20名を対象とした。

2) 方法

地域在住障がい者とその家族52名を対象とした車いすバスケ教室を2017年4月-12月の間で計16回実施した。スタッフの業務内容としては、①事前ミーティング(前回実施時の振り返りをもとに次回の練習内容の確認と役割分担)への参加、②当日の業務として車いすや道具の準備、利用者の体調チェック、車いすへの移乗介助、技術指導や活動サポート、ゲームコーチング、審判、終了後の体調チェック、後片付け、③クラス終了後の反省や振り返り、④スタッフ研修への参加であった。スタッフ研修は年2回実施した。1回目の研修は2017年4月に一次救命救急対応の講習及び実習、目標設定ワークショップ研修を行った。2回目の研修は2017年9月にコーチングスキル研修と目標確認のワークショップを行った。今年度初めて導入した一時救命救急対応研修は、4月にあいばを利用し、医科学センター角准教授のご指導のもと、AEDを使用した実習やロールプレイングを用いたグループワークを実施した。

この車いすバスケ教室の活動に参加したスタッフを対象に、教室開始前の4月と教室終了時の12月に、田引(2005)をもとに作成した「スタッフとして参加することによる成果として期待すること(12項目)」「スタッフとして参加する際に不安と感ずること(12項目)」についての自記式質問紙調査を実施した。各尺度項目については、5件法で測定し数量化した。なお、本研究の発表に際し、参加スタッフには研究の趣旨と内容、および記録の取り扱い方法について説明し、記録内容の公表について同意を得た。

3. 結果

2017年度の車いすバスケット教室利用者は、茨城県内外から52名が参加登録し、16回の練習会で参加した人数は延べ648名であった。20名のスタッフ全体の傾向を見るとともに、研究協力者を①リーダー(5名)、②2年以上の経験があるスタッフ(以下、経験者;10名)、③今年度初めて活動に参加したスタッフ(以下、初参加者;5名)、の3群に分けて質問紙の結果を検討した。車いすバスケット教室に参加することで期待する成果については、経験者、初参加者とも自身の成長や知識・指導技術等の向上を挙げたものが多かったのに対し、リーダーは利用者の成長、スタッフ間のコミュニケーションなど、プログラムの運営側としての視点が反映された意見が多かった。しかし、いずれにも共通していたのは「自分自身が楽しむこと」であった。また、初参加者と経験者・リーダーとの間で差が見られたのが「所属感を得られる」という項目に対する反応であった。経験者やリーダーは当初から活動参加によって得られる所属感に対して高い期待を示し、かつ終了後も成果として高いスコアが見られたが、初参加者は当初の期待値は低かったものの、終了後の成果としてスコアが上昇するという違いが見られた。一方で、「自身の成長」については開始時の期待は高かったものの成果としては低値を示した。開始前調査でスタッフの多くが最も不安と感じていた項目は「問題が生じた時の対応」であったが、終了時にはこの不安は減少する傾向が見られた。また、利用者やスタッフとのコミュニケーションについては、終了時ではスコアが減少していた。

4. 考察

結果から、経験の有無に関わらず車いすバスケット教室に参加したスタッフに共通していたのは、他者貢献のためだけでなく、自身の成長に期待し活動参加そのものを楽しむという能動的態度を有していたことであった。また、昨年度に続き今年度も車いすバスケット教室への参加によってスタッフの「所属感」が変化した。所属感とはアドラー心理学でいうところの「共同体感覚」へつながる重要な要因であり、自分にとって居場所があるという集団への帰属意識である。ISEプログラムは利用者にとっての活動の場及び社会とつながる場の提供を目的としているが、スタッフの活動継続要因として重要であるのは、スタッフにとっても仲間と一緒に役割を持って活動しているという実感なのではないか、と考えられた。一方、「自身の成長」という項目では期待値の高さに対して成果としては低値を示した。リーダーとスタッフ、という階層構造をもつ組織化を達成したことで、この3年間でより多くのスタッフと利用者を受け入れることができるようになったが、単なる上意下達の組織になってしまうと、スタッフ一人ひとりが受け身になってしまい、自身の積極的な学びを阻害しかねない。今後もリーダー研修およびスタッフ研修や実践の場を通して、それぞれの立場での学びと成長を引き出すことができる組織を育てていく必要があると考えた。

【茨城県における障がい者向けスポーツプログラムへのニーズ】

2017年度は7件の出張体験会・講習会の依頼があった(前年比+3件)。特別支援学校のみならず、小・中・高校からの依頼が新たに増えており、地域における障がい者スポーツへの関心の高まりを窺わせた。

5. 成果の発表

- 1) 齊藤まゆみ, 橘香織. 競技スポーツと練習環境. 体育の科学, 67(1);45-49, 2017
- 2) 久保田蒼, 高橋一史, 佐野久美子, 大橋ゆかり, 橘香織. 当院利用者を対象とした車いすスポーツ活動導入の試み - 活動参加による入院患者の心理的影響 -. 茨城県立医療大学附属病院研究誌ひろき 19;31-36, 2016.
- 3) 石田菜月, 堀田和司, 愛知裕子, 小柳明世, 久保田蒼, 橘香織. 障がい者スポーツに関わるボランティアスタッフの参加動機に関する研究～車いすバスケットボール教室の運営を通して～. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)
- 4) 小柳明世, 石田菜月, 愛知裕子, 久保田蒼, 橘香織. 特別支援学校における障がい者スポーツ出張体験会の開催報告. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)
- 5) 愛知裕子, 堀田和司, 石田菜月, 小柳明世, 久保田蒼, 橘香織. 車いすバスケットボール初心者プログラムに参加する地域在住障がい児・者へのアンケート調査. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)

6. 参考文献

- 1) 橘香織, 石田菜月, 相楽未由樹, 久保田蒼, 金井欣秀, 青柳亜希, 齋藤由香, 六崎裕高, 和田野安良, 水上昌文. 車いすバスケットボール初級教室への参加が障がい児・者の身体機能及び競技パフォーマンスに及ぼす影響. 茨城県立医療大学紀要(18) p.25-32, 2013.
- 2) 田引俊和, 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究, 医療福祉研究 (1) p85-93, 2005